谷垣史好句集

谷垣史好句集

川柳塔社

序

昭和三十年代、それは麻生路郎先生の晩年であったが、川柳雑誌社の支部として病院川柳会が二つ存在し、後に川柳塔社の推進力となる若者が育てられていた。

一つは川村好郎先生指導の羽曳野療養所どんぐり川柳会、もう一つは西尾栞先生指導の明和病院青蛙川柳会である。会員の増減激しく、五十人から八十人を越える時期もあれば、時にはたった三人のために毎月欠かさず指導に見えたというエピソードもあった。

前者には笠原吸江、香川酔々、高杉鬼遊、谷垣史好、板尾岳人、榎本吐来、藤井一二三、宮西弥生の諸氏ら、後者には小浜牧人、菱田満秋、河相すゝむ、吉本菁風の諸氏や私がいた。

史好さんが川柳塔社のパワーとして本格的な活動をはじめたのは、昭和五十五年秋、不二田一三夫氏が亡くなられてからで、編集長の私を助けて編集実務を担当、会計係の鬼遊さんと三人がスクラムを組み、当時はまだ七十頁に届かぬ『川柳塔』発行にいそしんだ。

どんぐり句会の三羽烏は、酔々、鬼遊、史好と自他ともに認めていたふうであったが、すでに二人は幽明境を異にしている。それゆえ鬼遊さんがこの句集発刊の中心となり、スタッフの友情出版となったのである。泉下の史好さんも本懐であろう。

史好さんの句と文章は、天衣無縫、史好さんのお人柄同様調和が取れていた。決して堅

くはない。それでいて知性漲り、ダンディーでおしゃれ、若い時分から物を見る目に幅と深さがあった。根っからの川柳人と言える人は須崎豆秋以後、史好さんを措いて外にはなく、二人に共通するのは肩書などに一切無関心であったことだ。

四つ子誕生　気合を入れたわけでなし
獰猛な兵士はいらぬ自衛隊
現実やめしに大中小があり
播但線風も都を落ちて行く
かぼちゃの絵仲良くするはむつかしき
核弾頭のような乳房が迫るなり
八十の母と五十の子の暮らし
人妻になっても君の稚い字
こんにゃくの角がうまいぞ冬の酒
おばはんを抱く豆腐屋の冷たい手
やがてニコニコ宅急便で届く核
愛は果敢なくマーラーは長すぎる
戒厳令の夜は抱き合うほかはなし

おお金魚お前も酸素足りないか

イメージは海部見習士官殿

サダム・フセイン汝を髭剃りの刑に

活け造り鯛は死ぬほど恥ずかしい

尿はつめたしおしっこはあたたかし

蟬三日蛍二十日の尊厳死

あの世から密書が届く出かけねば

ここに二十句だけを掲げるにとどめるが、この句集は先に触れた通り友情の発刊であることで、「男はつらいよ」の寅次郎の大のファンであった史好さんの温かい句を、一人でも多くの柳人が再確認して頂ければ望外の喜びです。

川柳塔社主幹

橘高　薫風

ほしがれいとことん搾取された貌

思春期のある日突然だまり込み

大本営発表ある日突然負けました

天井も屋根もぶち抜きたい暑さ

言いわけを天井向いて聞いている

無理な戦と負けてから分かり

出直すより外はないのにまだ夫婦

思案つかずもう朝刊を配る音

塩されて焼かれて鯛の晴れ姿

寮歌歌えば中年の血もたぎり

無縁仏にきょうも季節の花があり

口も耳もふたして社宅に住んでいる

そこらじゅう爪を飛ばしてさっぱりし

訥弁のはらわた煮えくり返ってる

愛されている証拠が女欲しいなり

形見分け早や団結がこわれかけ

急ぎ足もう友情もこれまでか

煙草銭だけでまんまと飼育され

人前だから握手で我慢する

発奮するたびに積んどく本が増え

春風に乗って納税督促状

束の間の人気もう脱ぐものがなし

姑の皮肉茶漬へ流しこみ

ホットパンツお茶もお花も習ってます

雨つづきコンピューターも狂いそう

男一匹たかが私用に気をつかい

お茶漬もそこそこ花火あがりだし

村捨てる旅へ見送る母があり

もう他人ではない朝日眩しすぎ

夕陽には祈り朝日は拝むもの

屋上のこれは助からない高さ

鍵っ子へポストの影が長く伸び

病名も言わず注射をしときましょ

思いきり喧嘩　夫婦のミゾがとれ

意地張った後ろ姿が淋しそう

読書百遍　哲学は眠くなり

美しいママ　マスターは隅にいる

猫抱いて味方はお前だけなんよ

ふるさとの静かな夜が眠られず

うちだけが電話を持ってない名簿

朝刊も夕刊も見ずハネムーン

ガンを見舞って雑談をして帰り

地下鉄で大きな声で口説かれる

あり余る金か知らぬが錦鯉

宣伝の中味知ってるチンドン屋

泳がされているとは知らずサングラス

犬かきで泳ぐしかない世間です

二人きりになってもこの人紳士的

便利大工らしくひっそり死にはった

人妻の恋が匂ってくる正午

寝たきりのくせに何もかも図星

先頭で騒ぐとピエロに見えてくる

いびきかく男は武器を捨てた顔

参院選ひよこみたいなのも混じり

プライドのかけら厭味に光ってる

ものずきがバスの一番前に乗り

副作用だけははっきりした効き目

応接間ここのピアノも月賦かな

親分のあぐら　やさしいことも言い

四つ子誕生　気合を入れたわけでなし

悪者はきっと亡びる村芝居

見えすいた芝居の末の多数決

よりどりの中から一番スカを引き

税金を払って仰ぐ青い空

唐草模様が子供心に恥ずかしく

時の人　模様眺める糸を垂れ

あいまいな顔しているが実力者

後半でやっと新郎ほめあげる

卑怯にも天皇陛下の名でしごき

獰猛な兵士はいらぬ自衛隊

吉良邸に迫る一人が欠けている

死んだ筈の女が匂う闇の底

伊吹颪よ吹くな仏が風邪を引く

死ぬときはひとりぼっちの雪だるま

見送ってほしい一人が来ていない

枯れ葉ひらひら頭の中はカネのこと

愛嬌があるのは時計屋の時計

鯛の子があればうれしい冬の酒

使う気はないが毒矢を持っている

米朝が語る地獄は楽しそう

笠智衆も僕もうとうと秋日和

恋をして賢くなって風邪を引き

ひっそりと句集「遍歴」書架にあり

女傑一代死ぬまで男はんが好き

みな誤解しているモナリザの微笑

現実やめしに大中小があり

安吾なつかし生きてることは息苦し

ガムテープ貼っても喋りそうな口

花の下　敗北したと思わない

お賽銭春夏秋冬さむい音

輪廻とはかくの如きか観覧車

別荘でいる気でおれと見舞客

脳味噌まで乾かす音よドライヤー

意地悪な神様がいてまだ独り

心ときめく四十の俺としたことが

そこまでの散歩へ口紅引いてくる

闘病十年神より人をまだ信じ

青春の骸よ書架の資本論

余情無くナイターの灯はすぐ消され

ズバズバと言うて女に好かれてる

からませた小指へ熱い血が流れ

プールサイドすがすがしきは九月の陽

折伏を言い負かした日の微熱

謝ればあやまり方にまたからみ

退院の荷物小さな恋も秘め

護摩たいてもろて喘息むせており

四五日はお客のように扱われ

心こめた荷物手カギで扱われ

掛時計俺の寿命を刻む音

ひそやかに触れれば乳房生きており

海の広さへ人間石を投げたがり

ヒヨコの雄がこんなに安いとはショック

ハネムーンなんで万歳するんやろ

箒持って俺には肉体労働さ

あきらめた筈のあの娘の誕生日

飄然と帰れば故郷夏祭り

ロングスカートの方が不潔に見えるなり

あてのない散歩へ枯葉ついてくる

暖房へ冬の蚊年を越す気らし

ソバカスをいとしいものと見るも恋

闇が呟いている闇の静けさ

死体折るように寝椅子を折り畳む

宣伝カー男の声のむし暑し

ネオンひたひたさながら敵の軍勢か

鉛筆を削れば少年の日が匂い

ラッシュアワー日本に生れたのを呪い

書店煌々と立ち読み繁昌し

吸取紙のようにおしゃべり聞いてくれ

総理登壇もっと面をあげ給え

一病息災他人はのん気なことを言う

りきゅう下駄けなげに生きる響きかな

四十とはかくも哀しくなま臭く

美しいひと美しく風邪をひき

いやな予感ネクタイうまく締まらない

出す金を出して小心ほっとする

混浴と聞いて眼鏡のまま入り

われながら不器用な抱擁と思い

唐草の風呂敷持ってると嗤う

やっと二人になったら僕の降りる駅

ご詠歌に似てくる祖母の子守唄

はえば立て立てば襖を破りだし

男手はなんでも味の素を入れ

七十年の疲れがどっときた寝顔

瞼の底に俺の死にざまが見える

ねんねこが似合う夫に成下り

弔吟へ遺影ひと言いいたそう

残された肺いっぱいに春を吸い

断崖は女を置いて見る景色

席譲った方が逃げるように立ち

その言葉教えた人は死んだんだよ鸚鵡

制服を着て気味悪い大学生

マンネリを断たん木刀素振りする

終電の誰かに絡みたい気分

朝顔が咲いてるうちのひと仕事

女みな小さなお店出したがり

ホモっ気があるのかやわらかな握手

おしつまりましてと長い立ち話

閏年一日さみしい日がふえる

この家は犬も虚勢をはってるよ

夜桜は妻に言えないひとと行き

おばあちゃんの若さグリルで食べたがり

己に腹を立てながら観るポルノ

河馬悠然と四次元の顔である

流行が変ったんよとねだられる

バナナほおばる口紅の生々し

マネキンを脱がすに何故か羞恥心

革命に縁なき顔よ満員車

ワンタッチ傍若無人に開く傘

地球儀にこんな綺麗な海があり

お帳場の隅で仲居が飲む胃散

ふっくらと肥えた娘がいるベーカリー

街道に一つ灯がある何でも屋

遠い瞳になって吹いてるハーモニカ

十二月小鳥の水をまた忘れ

きょう一日を笑わなかった守衛

はんぱ物の売場へ西陽よう当り

土建屋のセンスで国を治める気

除夜を待つ炬燵に万太郎句集

火焙りの刑を楽しむ炉ばた焼

世界地図日本は力んでるみたい

奴凧落ちても意地を張りつづけ

手袋をはめて豆腐屋も堕落

採寸の手がデリケートなとこに触れ

自由業きょうも草競馬で出合い

主治医にも言えない恋をあたためる

風薫る街は手ブラで歩こうよ

告白が本気にされぬ下がり眉

帰るべき故郷もなしギター弾く

鉄橋に夕日倖せまだ遠い

銭湯をゆったり出ればいい月夜

年の瀬に身を置きたくて街に出る

芝翫香(しかんこう)ここも月賦がきく時世

人間が愚かに見える豚の鼻

雪の降る景色の中の霊柩車

待ち合せ恩師が先に来ておられ

風邪やっと治り皮肉が出始めた

お位牌が見てはるてんご止めなはれ

メニューから素うどんが消え値上げされ

春の宵お前理屈が多すぎる

霊園へ花見　君等も死ぬんだよ

したたかな女　スルメで酒をのみ

ロウソクまで値上げされたよ仏さん

十年一日頭が薄くなっただけ

遺跡掘る人夫怠けている如し

秋日和小さな仕事片づける

地団太を踏めば階下(したた)から怒鳴られる

図星さされてトイレへ行きよった

水すましすいすい明日は明日のこと

看板の誤字気にしない気にしない

うどんともいえぬ値段になりにけり

空瓶のフタのないのは寒そうな

男はんに言えん病気があるのなり

雨だれを黙って聞いている破局

予報官職場に傘を置いてあり

播但線風も都を落ちて行く

青春が欲しくて麦藁帽を買う

秋の空きょうも小さな嘘をつき

子供会のことで今夜も出てはりま

玄関を出しなに用を言う女

煮豆屋の夫婦の顔も十二月

阪妻の人を斬る眼と恋うる目と

待ち呆け酒饅頭を買うて去に

元日や場末の如き湊町

正月も昔の父は恐かった

春の愁いを引きずるようにパンタロン

時間給にしたらお布施はこんなもの

庭の八つ手のアナクロニズム

靴音の高い女を許せない

啓蟄や寝起きの悪い虫もいる

ギャンブルがない水曜の空の色

軽いめまいは美少女の片想い

小公園　乾いた土と老人と

ポプラ吹く風は偽善の匂いする

ざるそばを食べて革命など出来ぬ

古い日記の蚊が死んでいる一頁

コップ酒なぜ往来に背を向ける

屑籠の位置まで腹が立ってくる

かぼちゃの絵仲良くするはむつかしき

悪人も善人も死に青い空

駄菓子屋へひとり来る子は哀しい子

彼岸花　戦の記憶遠ざかる

生年月日だけは素直に信じよう

湖へ散弾銃が響き冬

憂国の演説寒き暮れの街

頑丈な格子の如き面構え

わが道は愚直コトコト豆を煮る

母のいない闇の深さを考える

巻頭の一首きびしき冬木立

右顧左眄磁石は北を指している

しんしんと雪は重さがない如く

町内の角を曲がると武装する

懐かしき小使室の大薬缶

核弾頭のような乳房が迫るなり

ハンモック地球はなれて昼寝する

恋は実らず積立は満期

お日様が昇ると世間しらじらし

目の前で裂いたうなぎを食べている

白昼に聞く尺八のニヒリズム

中流と思うわが家は雨が洩り

飛行船に乗る夢だけは捨てまいぞ

ハッタイ粉おれも分別臭くなり

虫ケラの死にふさわしき三里塚

昼の月誰かを尾行したくなる

口笛を吹いて人生拗ねている

小さめの乳房好もし秋のひと

素うどんとめしでニヒルな昼にする

春になると文房具屋になりたくて

応接間で流す涙は空涙

田吾作も与太郎さえも嫁がいる

兄弟の無口がつづく花曇り

抱かれても猫のしっぽは醒めている

爪をとぐ女の敵は女なの

牛丼の肉もおいらも落ちこぼれ

人間のやさしさを恋うしゃれこうべ

切り口の冴えが鈍って五十五に

読みさしの本が幾冊菜種梅雨

忽然と消えたし零番ホームから

体重の軽さを風にからかわれ

がり版刷りが似合う貧しき半生記

玉砕の島をビキニが闊歩する

恐ろしや物を見る目で子を見つめ

まねき猫この世の欲はお見通し

冬の蚊よ俺も逃げ場のない書斎

男ひとりちりめんじゃこで飯を食う

雀まんまる厳冬に耐えている

文明を怨むポケットベルが鳴る

シベリアに遺恨はないが寒すぎる

八十の母と五十の子の暮らし

沈丁花恋うてはならぬ人を恋い

人妻の恋は視線が定まらぬ

哲学書あの頃いつも空きっ腹

武者飾る飢えも戦も幻に

お人好し四季折々の風邪を引き

白菜をザクリ迷いを真っ二つ

弱い男と甘いリンゴが多すぎる

春ざわざわ一級河川まだ眠り

床の間の花とトイレに飾る花

苛立ちをしずめる匂い古本屋

脂ぎった顔で福祉を議論する

はしゃいでる酒はさみしいことがあり

真夏日に汗をかかない偽善者め

千発の花火を見てもふっ切れぬ

人妻になっても君の稚い字

空缶を蹴とばし俺の夏終る

警報が遠く聞こえるわらび餅

会う場所は少しキザだが紀伊国屋

君の不幸は社内人事に詳しすぎ

研修という名で昼の露天風呂

暮らしとは日々ガラクタがふえるなり

小食の家族と八百屋知っている

あみだくじ生きてゆくとはこのような

さみしきは夜中の時計一つ打ち

ひとはみな友情という腐れ縁

五十歩と百歩その差が縮まらぬ

ほっといてと言われて男ほっとけず

雨や憂し家庭医学の赤い本

鼻の穴性善説を信じよう

身のほどを知らぬ女の夏帽子

靴下に昔なつかし穴があき

食べ歩き地図で探した天井屋

電車では立っていました少国民

さみしさが少し紛れる君の鼻

廿一世紀をちょっとのぞいて死にたいな

五十過ぎて中途半端な預金帳

なめんなよ腹に晒を巻いている

蚊とんぼよお前もきっと病気がち

焼芋が好きで情緒が不安定

抱擁の目のはしに入る天守閣

寝返りをしない女を憎みけり

労働者諸君も今は土地を持ち

スリコギのいのちを思う母おもう

車椅子目につくものを買いたがり

愛は淫らナメクジの這うた跡

げに妻という名の不沈空母かな

弱い者同士に似合う縄のれん

月光よいつか一人になる茶碗

二階から見る葬式の喜劇めく

糟糠の妻と男が思うだけ

幸福な視野を横切る黒い猫

ご無沙汰は故郷のいとこと古本屋

おお同志日光写真知ってたか

俗中の俗太刀魚の銀の色

浅漬が好き人生を割切ろう

秋になりパンは六枚切を買う

ゼムピンも箱に入れればからみ合い

こんにゃくの角がうまいぞ冬の酒

端金それが子供の言うことか

君の一枚その他百余の年賀状

天罰か男五十の水仕事

何となく欝の日鰤の切身買う

ミサイルの射程の中で睦み合い

僧衣からのぞくデジタル腕時計

ああ恋の骸よ女あくびする

この道を行くほかはなしけもの道

動物園が閉まりキリンの首伸びる

カマボコの板を捨てるに忍びない

軍備増強素肌に毛皮着る如し

桃の花霞みこの世はすべて些事

熱演は裸になっただけのこと

生まれ来しものに業あり河馬の貌

羽根ぶとん絆も軽くなりました

こめかみに澱む欲求不満の血

愛ゆえの痴態神様お許しを

そしてプラハに思いを馳せる五月の陽

孤独とは男の部屋の縫いぐるみ

切られても動く愛想のいい尻尾

雨降りに出したハガキが泣いて着き

良妻賢母だからお誘いしたいなり

おばはんを抱く豆腐屋の冷たい手

餡パンにヘソあり女愛すべし

うるさ型がいるから五十音順に

猿の目でお客見ている猿回し

銘々皿二月は殊の外寡黙

銭湯を愛し次第に少数派

恋病　春の日付の診断書

改装をしてもゴチャゴチャ荒物屋

やがてニコニコ宅急便で届く核

いのち軽し棒高跳のバーが揺れ

連想がポルノチックになるも春

三人連れの一人無口になりがちで

死なば今　桃色吐息聞きながら

物憂きは春も終りの小間物屋

甲虫かごを逃げても歩道橋

こだわりやたかが小銭という勿れ

女医さんと二人眼科の暗い部屋

痩せ蛙よそ見の癖がなおらない

壮大なゴミとなる日の地球かな

人妻のホットパンツは罪深し

正論は正論として床の間に

やがて秋紺の背広が待っている

何買うてきても食べるのはひとり

お元気な陛下を母は生き甲斐に

お喋りは楽しくしようふくらし粉

惚れているから返してほしくないお金

きょう口をきいたは集金人とだけ

筑波へも行かずキャッツも見ずに秋

一九九九年大つもごりの蕎麦の味

赤インク思えば長いつき合いだ

肉じゃがが好きかそれなら信じよう

口ついて出たは腹にもない言葉

悪乗りの最たるものよロンとヤス

南区は消えても消えぬミナミの灯

この世には美人はいない午前四時

風は五月お弁当でもこしらえて

人嫌いには非ず酒場の隅にいる

こんにゃくの馬鹿正直は生れつき

良心を家に残して逢いに行く

葬式セットそんなギフトを下さいな

ゴボ天を揚げるリズムは腰でとり

灯を消せば灯がなつかしき路郎の忌

猫のひげ何かいたずらする気だな

脳味噌がグジュぐじゅグジュと梅雨に入り

可愛さは軽いジョークにむきになり

年上の恋は小皿にとってやり

ノホホンと暮らして苺ジャムが好き

ギャル多弁天下国家は他人事

地球にも盲腸があるアラブテロ

八月のこの日もやがてパロディに

方丈記今年も蟬が鳴いている

方程式を解けば答えは雌と雄

鰺一尾　貴公子然と売れ残り

男って何だ居酒屋麻雀屋

安吾懐かし生きてることは息苦し

マネーマネーこんな日本に誰がした

忠義にはもとより無縁猫のひげ

テープカットに五人も並ぶことはない

ボクシングジムに通っている出前

手袋をどこに忘れた冬の恋

公民館の初の仕事はお葬式

たかが女と口が裂けても言えませぬ

消えそうで消えぬ私のロウソクよ

悪人は背後　死神は枕許

大根の白い裸身が眩しくて

愛すべきは女　御しがたきも女

路郎忌や視野遥かなり高野杉

電卓の哀れ粗品となりにけり

もみあげが気になるバスの運転手

銷夏法の一つ赤川次郎読む

腑におちん顔で寝ている棺の中

おんな一人加わり形而下的話題

耄碌という字にひそむしたたかさ

小説が書けそう有馬へ来ています

魚屋で鰈の動悸見ていたり

愛は果敢なくマーラーは長すぎる

秋深むチェロより細きチェロ奏者

定年やコトンと蝶番がはずれ

果報かな三男三女枕辺に

悲しみは白い脚絆の旅支度

本のこと知らぬ本屋の女店員

紙おむつ有難しとも憎しとも

こんなとき真っ赤に咲くは馬鹿な花

福神漬の存在価値と私と

濁り世にどうして出ない海坊主

鉄格子とも見える原稿紙の桝目

葬儀屋のくわえ煙草も春めいて

血を喀いて極彩色の夢一夜

わが生はかくもかぼそき銀の笛

締切りがないから手紙のびのびに

横道が好きで歩いたわけでなし

ボタン一つとれたままなり百ヵ日

サミットが思いやられる稚な顔

飼育係にアシカが恋をしてしまい

ヘソを見てこわい顔する人はない

湯に浮けばいっそおかしいあばら骨

平和主義者ばかりではない駅の鳩

おんな運ひとつ消えたらみな消えた

クラリネットはときどき粋な嘘をつき

理不尽は声の大きな方が勝ち

幸運はいつも股間を抜けて行き

楕円球より扱いにくいのは女

ちょっかいを出したあんたがアホなんや

ひとりだけ育ちが違うメロンパン

元号がどう変ろうと御名御璽

年月や友だちでなし恋でなし

お湯が出る暮しノラにはなれませぬ

追い出した猫にときどき町で遇う

表情を美事に殺し執事たり

戒厳令の夜は抱き合うほかはなし

桜散る男尊女卑も美事散る

夢の一つに君と時計のない暮らし

支出ゼロそんな日もある暮らしなり

捨てようと誰も言わない亡母の杖

手に余る重さ女と広辞苑

人生に懐疑を持たず太りすぎ

シュプレヒコールは泡ふく蟹に似て

ハンモック頼りないのが人生か

虐待を喜んでいる縫いぐるみ

おお金魚お前も酸素足りないか

死んでしまえばいい奴だった泥の河

重量挙のごとくふとんを上げるなり

告げ口を僕にされても困るなり

連れ立っていそいそどこへ葬式へ

春の野の霞の如く暮らさんか

流氷が去り幻の恋も去り

あるときは男と女　叔父と姪

ご主人があったのですか婦長さん

世の中がみな中腰になっている

シャンソンを習いますのとぬかしたり

イメージは海部見習士官殿

裏表ないのは亀の子たわしだけ

眠られぬ視野に人形ケースの目

昼日なか今日も両手が遊んでいる

ペン胼胝よ長い勤めは終ったぞ

魚屋が魚に水を掛けている

サダム・フセイン汝を髭剃りの刑に

煩悩や酸素少ない血が騒ぐ

平和平和と誰もコタツを出たがらぬ

美女だから迷彩服が似合うのさ

烏賊という文字面白し墨を吐く

ロマンスに縁なき髪となりにけり

散策の道筋にある墓石店

夏の女の鎖骨に魔力めいたもの

タイガース　選手もファンもきっとマゾ

もう強いて生きたいという世でもなし

大河かな死者が流れる神が流れる

戻らないものに株価と体重と

活け造り鯛は死ぬほど恥ずかしい

運命はいつもふらりとやって来る

髭を剃る誰方が来てもいいように

特攻に似て冬の蚊を殺せない

ソ連崩壊　大家のいなくなった長屋

目が見えて食えて歩けてよしとせん

風葬にしていただけるならモンゴルで

ぼくも政治もぼてぼてのゴロばかり

恥ずかしいほどちっぽけなゴミを出し

くちばしの黄色い女占い師

ナマケモノという動物がおり安心す

十代の眩しき肌や原爆忌

堕落して犬のにおいのしない犬

センサーが働きコノヒトイイヒトダ

ニコニコと総理の職が楽しそう

尿はつめたしおしっこはあたたかし

バリュームを飲みなれるのも淋しけれ

幻覚か柱時計が鳴っている

なつかしき見舞い明石の焼あなご

烏かあーお前は無責任野党

蕎麦食えばそこに池波正太郎

地球揺すると難民がこぼれ落ち

蟬三日蛍二十日の尊厳死

あの世から密書が届く出かけねば

史好句集発刊に寄せて

榎本　吐来

私の手許に史好さんが亡くなられる二年程前からの来状が十通ばかりある。「八月末からまた羽曳野病院に入院しています。いつになったら縁が切れるのか、特に今回は胸の骨に異常があり、治療にどの程度の期間を要するか、今のところ分からない状況です。十階の窓から羽曳が丘の住宅群が一望に眺められ、今の小生にはそれが別世界の如く感ぜられます。句はさっぱり出来ません。」

これは前年九月の便りである。そして最後になった便りに「お元気ですか。退院したときは、それなりの意気込みもあったはずなのに三ヶ月余経った今では、すっかり怠け者になってしまったようです。人間怠けだすと、とことん怠けられるものだということが分かりました。足のしびれは少しずつ悪くなるようで、加えて、手の指の感覚まで近頃おかしくなってきました。この先どうなることやら。考えても仕方のないことですが…」とある。

昭和十八年、大阪商大予科二年生の時、台湾に学徒動員され、彼の地で背負った結核に終生つきまとわれることになる。そして戦後の厳しい中を、この病のゆえに若人の晴れがましい就職を体験することもなく、身すぎ世すぎの生活を余儀なくされる。とは言っても、やむなく従事したといわれる日本繊維研究会誌、更には紡織通信誌の校正・編集実務にお

ける彼の手腕が高く評価されたことは言うまでもない。

こうした彼が羽曳野診療所で川柳と出会ったのが昭和三十年代の終り、四十歳の坂に踏み入れる直前であった。

ここから彼の第二の人生がはじまる。これまで病と共に温めてきた内向的な人間性が、所を得て一気に噴き出したのである。

「人生とは何か」、「人はいかに生くべきか」等々の青くさいテーマは、とっくに卒業していたであろうが、それにしても捨て場のない鬱々とした状態からは無縁でなかったろう。そこから天衣無縫に歩き出したのである。

しかし、奔放に歩き出したとは言え、生来シャイな彼の人柄は常に抑えることを知っていた。講釈は無用、彼の句を見ての通りである。ドライな表現の中に、そこはかとない哀歓を秘めた句、これが川柳の真髄であるならば、史好句はまさしくその亀鑑と称すべきであろう。

ここに再び陽の目を浴びた五百四十句の中に、生きとし生きた史好さんの姿が彷彿とする。

上梓された句集を前にして「生前の貴兄にお見せしたかった」と言えば、「そうですね、ウフフフ…」と笑う史好さんの姿が目に泛ぶようだ。

鰺一尾　貴公子然と売れ残り　史好

あとがき

高杉鬼遊

畏友、谷垣史好さんの句集を発刊することができた。今、咲ききった桜の大樹を見る思いがしてならない。

彼との出合いは私にとって川柳との出合いでもある。療養所時代から約三十年の親交があり、また作句上のよきライバルとして、目標に彼がいてくれたことは大変しあわせだったと思える。

麻生路郎師を知らなかった私が、句集『旅人』によって、川柳の厳しさ激しさを知り、須崎豆秋句集『ふるさと』によって、飄々とした人間性を知ることができたのは、句集による大きな力だったと思う。史好さんの句集も、そうした流れの一つとして読んで頂ければ幸せである。

橘高薫風主幹に序文を頂き、津守柳伸、小出智子、塩満敏、河内天笑、榎本吐来、田中正坊、奥田みつ子各氏のご尽力に感謝する。

川村好郎先生と史好さんに、あの世で「何んやねん」と笑われるかも知れないが、つつしんで、故谷垣史好の霊にささげる。

谷　垣　史　好

（略　歴）

・本籍　兵庫県養父郡八鹿町

・１９２５年１月２日　神戸市で誕生

・１９３１年　神戸市二宮小学校に入学

・１９３７年　明石中学校に入学

・１９４２年　大阪商科大学に入学

・１９４３年　学徒動員で台湾に派遣

・台湾動員中に肺疾患に冒される

・１９４５年末帰国

・戦後、病を養いながら日本繊維研究会（大阪市北区京町堀）編集に従事，その後，紡織通信（東レ，東洋紡等関連業界誌）の編集・校正事務に従事

・この間，肺疾患のため羽曳野病院に前後４回にわたり入退院を繰り返す

・１９９３年１０月２６日死去(於　羽曳野病院　多臓器不全)　６８歳

（柳　歴）

・１９６４頃羽曳野病院で西いわを，川村好郎師の指導により川柳入門

・１９６５年１２月　川柳塔社誌友

・１９６８年１１月　川柳塔社同人

・１９８１年１月～１９８８年１１月　川柳塔社編集部委員

・１９８３年～１９９０年　常任理事

・１９９０年～１９９３年　参与

1995年6月6日発行

谷垣史好句集

頒価 500円（送料 240円）

発行所　川　柳　塔　社

〒545 大阪市阿倍野区三明町2－10－16
ウエムラ第2ビル202号室
電話（06）629－6914
振替　00980－5－33368

美研アート印刷